

第9部会

1. セッションⅠで討議された内容

まず、野田委員（聖小）に、聖小における算数の新教育課程についての報告と「新指導要領で公立小学校の算数はこんなに変わる（変わってしまう）！」という内容のレクチャーをお願いした。新指導要領に完全に従うであろう公立小学校では、内容の3割削減が現実のものとなり、算数の変化 - 質の低下 - が顕著なものとなる。そのことは、中学高校で数学を担当している者として、当然、よく知っておかなければならない事柄である。しかし、小学校6年間の流れの中で、具体的にどのようにその質の低下が進行して行くのか、という点について、中高の教員はハッキリと実感を持って把握し切れていないというのが、偽らざる現状であった。そこで、中高の数学担当者の多くが集う部会の機会を用いて、小学校の算数の専門家から、具体的に、話をうかがい、共通の認識を得たいと考えた次第である。

野田委員には、「今までは（旧い課程では）教えられていた＜こういう計算＞が、これからは（新しい課程では）できなくなってしまう」、そういう具体例をいくつかご教示頂いた。

更に、野田委員から、公立小学校ではそのようなショッキングな状況が現れて行くが、聖学院小学校では、「現在の生徒の学力は落とさない」という方針であること。各学年で削除された箇所を補いつつ、新教科書の6年分を6年生の途中までで終え、その後、現行の旧い教科書等を用いて、中学に移行された内容を補って行く。そして、『算数・数学一貫教育の研究』の成果を活かして、6年生では、文字と式・一次方程式の授業をカリキュラムに入れることが報告された。

中高側の部会メンバーは、このレクチャーに非常にショックを受け、「公立小学校の新課程における卒業生を迎えるには、それなりの覚悟を固め、対策を今の内に練っておかなければならない」という緊張を覚えさせられた。新指導要領がミニマムスタンダードであるなら、小学校間で様々な格差が生じて当然ということになる。たとえ入学試験という関門を通過して来るとは言え、公立小出身者と小学校で旧課程の内容をしっかりと学習してきた聖小出身者との間には、学力差や学校観の違い（「勉強は塾ですもの、学校は仕方なく来る所」VS「学校は信頼できる学びの場」）が著しいものとなるのではないか。そういう現実に対応していかなければならない、ということが確認された。

2. セッションⅡで討議された内容

おもに、聖学院中高の三部委員と女子聖学院中高の糸井委員から、それぞれの学校における教育課程の改訂作業の到達点を報告して頂いた。

男子中高では、「中学高校の一貫性を重視して、英語・数学を重点教科とする」という方針が示され、中学の数学の時間数はプラス3時間となったこと、そして、6年間の大枠が決定され、その細部の検討が鋭意進められている、とのことであった。

女子中高では、来年度から中学が『正課授業五日制プラス土曜日の有効利用』という制度を採用することになったこと、その制度の中で、6年間の枠組みを決定し、現在、土曜日に行われる補習や自学自習の指導方法の在り方を検討している、とのことであっ

た。

男子中高、女子中高のそれぞれの事情は異なっており、中高の一貫教育の進め方には違いがあつて当然であるが、共通の問題意識や話題も多く、このセッションでは、特に、中学でしっかりした計算力をつけるための対策(生徒が意欲的に取り組むための方策)、既習事項の復習を有効に行うために実施する小テストの持ち方(高校2年生・3年生対象)等について、現状の報告や意見交換が行われた。

また、大学の部会メンバーから、数学(特に統計・微分積分)は文系と言えども必須の道具であるから、中高では、生徒全員の数学の基礎学力を底上げする努力を続けて欲しい、小中高の現行の教科書における統計の扱いについては問題点が多いので、聖学院ではしっかりした統計教育をして欲しい、との要望が出された。

3. 今後の課題、継続討議について

いよいよ新教育課程が本格的にスタートする時期を目前にして、当日の部会は、聖学院の算数・数学一貫教育について、その現実と現場にあつて実際に取り組む私達の姿勢をお互いに確認し合う場となった。

今後の課題としては、第一に、部会メンバーが、それぞれの所属学校の新教育課程における教科の中身を更に検討し、一貫カリキュラムの流れを確かなものとし、世代的に低学力時代を迎えている児童生徒の学力を伸ばす工夫を現実化していく作業に取り組むことである。そして、その作業をより実りのあるものとするために、部会委員を中心として情報の交換を行い、お互いの歩みの参考に資することである。

第二の課題は、中学入試の算数の出題範囲をより良く決定することである。「2003年度中学入試の出題範囲をどうするか」という問題について、それぞれの学校が、実情を踏まえた上で、現実的な対応策を打ち出していかなければならない。「旧課程に拠って出題する」という線も考えられるが、低学力時代の小学生に果たしてそれが通用するか、疑問視する見解も出されている。また、入試問題は、その学校が「入学生にどのような算数の学力を要求しているのか」という点で、学校の見識が問われるものであるから、しっかりした立論が求められる。見識を示すと同時に、学校の実情に見合った有効な対応策を策定するために、特に、このテーマで、男子・女子の中高間で意見交換を行っていきたいと、希望している。

(報告者：木村 徹朗)